

久松集

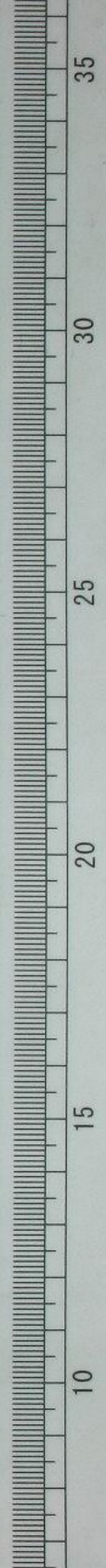
八

拾遺集 十九首
堀川百首 五十首

辰

二

土岐文庫
文庫17
W43
5



文庫 17
W43
5



次拾遺集中十九首

和字文庫

一 ころりわ 二 ころりなま
 三 菊の露測とぬら 四 やまのささ
 五 ちちらよれり 六 ならたをぬら
 七 花乃か 八 ころりわ
 九 やとちゆらぬ 十 ころりさ
 十一 ころりひ 十二 ころりむ
 十三 ころりつと 十四 ころりく
 十五 ころり種 十六 ころりく
 十七 ころり初 十八 ころりく
 十九 ころりく

ふし

昭和六十年二月一日
土岐善彦氏 贈

010185195169

花さくまらよあひよくらうれ
漢武帝の仙法をかりしひてし
孫のさうりーんがわ七月の東瀛
小西王母とつふ仙母は系をよのりて
武帝の養花殿よのめり時仙人東
方翔とつふとくぬあかの屏風乃
うらよとくわてあわたり帝
不死の系とこひ孫やよのさか
うとくとくひく桃七枝とあて
いぬーら帝自ニ枝とさうり

てのぬまうくし桃うらうま
下ちよらうじとあひよくらうれ
母笑えられいとお年よ二夏がり桃
かり下ちよらうじ物よあてし
屏風のうらうらよ竹のうらうら二
あわとくわて喰ぬるりのかりと
うらうらこの仙宮の桃と花の院
よませ孫つるかり王母さあめし
うらうらまの使さあめらんよ
よせくつひとまのさうり

六 夫の代にわきの衣をぬきて
かつらもはきぬ衣をかきかむ
經云方四十里磐石と云年よ一衣枕
夫より来て夫人之銖の衣をてな
てつらとと一知と云六銖と一を
とれん半分よりおかしむいふ
うらさ衣がわはむとよりの夫人
よふらつく夫よの衣と云のん衣と
つふわきのんうらもの半後撰よ
つらとと

七 梅の花露よのきこら顔に
かきてまねく人けむい
百詠云哀露侶啼粧と云花の露
わきこら人のけむ顔よ似るがわ
本恨新よ云玉顔寂寞泪欄于梨花
一枝春苔雨と云これ利業花のぬよ
わきこらと人のけむかよぬと
ぬりなり
はうの山よつくまのそわめこれ
そめんしよかきこらぬ

とつふかりの秀才の進士きんしがし
かりとつふかり家乃風の家業いけわざと
傳ふかり月のうら八桂乃むかり
百詠註曰南列有八桂樹生て月守
月うられ則桂生かり月よむ菟うさぎ
月うらて精成歎免ようこころと
きて一しれい万葉よつかり
十七我らえも岩代のじよしれ
あ年のあもめれうら
是の物終よ念すうらよて

うらじよしれめこらまきり
世とうらてよまじあわら
一世紀倭國岩代よてらう
じよしれ松かり
岩代のらぬ松と引じよし
まこらあら又ら
十八えらるらふんあれた
鴨よとらかり
是の能宣鈴かりらぬのらも
とらひらるらひられ

舟車下之三

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

次後拾遺集二十六首

一 花ののりふ	二 なるわたり
三 庭しりぬ	四 おまきく
五 おわふらの海	六 らるる花より
七 あもあかり	八 めもれと
九 ろしとわふ	十 らぬつと
十一 わりり	十二 られ家あり
十三 られとをらり	十四 られら
十五 らも草	十六 られぬの草
十七 らくま	十八 ら今のと

十九 雪のわされ 約 女上陽人

廿一 王昭君

廿二 うらなむ

廿三 うめ科

廿四 じな

廿五 山うら

廿六 あいのこ

廿七 せはさ

廿八 まよのあ

廿九 められつらえ

卅一 かのつのお

卅二 うら

卅三 雪のうら

卅四 まあ

卅五 うら

卅六 ゆまひるま

卅七 一味の西

大和歌集卷之三十一

一 雪のわされのれはふせからあらせ

いはいしの半とらまい

桃李不言自成蹊とらふこのあり

うれの廣よ李廣とりふ武をれら

とらりてとせる半もならあらま

徳あるののとてうらのとく人のは

とひしと桃李ののらふこのな

とれもんのあつまりのあらま

とらまあらまらりの半なら廣

よの桃李とめてあらまらすらん

七
とほれしけとらせむかき
もも多かり物ゆれあかり
誰謂水魚心濃艶臨而浪変色と
ゆふをかち

ハめもうれとらうらうらん白菊の

これゆわ後の花かき
是非花中偏愛菊此花用後更喜花
とふ詩乃むかめもうれとら
目ものこれとら
九めら本よおまもませむかき

いしとあらふかき
めら本よ細代かり蜀江濯錦
とふ文なかりゆとあはひて
とらゆとあらふかき魚
鱗乃ゆとあらふかき
あはかりゆとあらふかき
ゆかかりゆとあらふかき
とらゆとあらふかき
十末代かりゆとあらふかき
ゆとあらふかき

徳是北辰椿葉影再改とくは文の
心なり椿以八千歳為秋以八千歳為
春也これいさつとむ椿の八千歳を
よめり白玉椿とるしとるさくは
まじよなりとりよなり
十一 志う代りあはれ一なる花の
塵積成山とらふ半ありかた今
乃序よとえり
十二 志う代りあはれ一なる花の

江乃る山もかしくわよ
明王乃時よ黄河一清とらふとよ
めりなり江といふの際なり
といふ物なり露の影にさす
つりふりれなれはてあり
十三 うつとわりの人に行きぬ
楊岐路滑我送人多年李門波高人
送我何日といふ詩の心なり
わりの人といふをわりの人

いさめりてよーあちまのくろやあは
まらと目めきるたれにがわ
十六なごたつと目よまていふあは
らぬこの昔れむらうきたれ
是の借るの物のかかり一はの
こまうまよめひとまていしう
さうきかぬくあちまのくろや
乃あひのかりしあちまのくろや
よあち
十七あちまのくろやあちまのくろや

あちまのくろやあちまのくろや
信濃乃因よりあちまのくろや
あちまのくろやあちまのくろや
のよきまていふあちまのくろや
ゆきまていふあちまのくろや
えぬかちあちまのくろや
あちまのくろやあちまのくろや
あちまのくろやあちまのくろや
十八あちまのくろやあちまのくろや
あちまのくろやあちまのくろや

伯牙鐘子期とて二人の琴の上の
 上はわかれし子期死しる時伯牙
 一ひらり人ありきりてわれいりて
 といひてこの結とぬらして全
 心くさわし半ん

十九あつらつる雪れ釣のそり
 忘りてあつらつるあつらつるめ
 雪中放馬朝尋跡と云約のむ
 大いししるるる人も人とも
 せいしるるるるるるるるるる

文集曰蕭々暗雨打窓聲とて
 とてとてとてとてとてとてとて
 上陽人十三年てまらあつらつる
 楊安地より人ありてとてとて
 帝よとてとてとてとてとてとて
 一く帝よとてとてとてとてとて
 一日とてとてとてとてとてとて
 ねとてとてとてとてとてとてとて
 ひかしてとてとてとてとてとて

とみのとらへのなうれがまん
聖徳太子とらみのとほよせ
ふめてまうりあてりあなり又珠乃
能くよりりあ結つるうこかあさん
いは太子のーとまき結つるとおれ
いたのかうれとつめ
たのよらうーれ神もあうれとあかん
むたーとあかんーとてうれ
太上天向とらむじかーとらうひよぬ
とあらかわはふらうーとあかんか

かろくの地つとあめあめ
とてあかんかろらあかありま
神教とい生死のうととらうりあ
いとよぬとらあ殺着神の昇竟
うととらうらむじかーとあかん
は神とあかんけもあかんてあかん
らんさ後と藤院とらうーとあかん
てよませ結つるあかん
あかん結つるあかん
あかん結つるあかん

燕の太子丹とらふ人 秦始王の時
 秦のよゆきそて牛頭よりしじとる
 と帝ゆるし給うとてしはしはら
 一うくかちてするは角あひさん
 時らくしといふとのぬまひん
 舟をとりあそびてなげくはぬら
 まらよらととのらら一りく
 るは角はひらあぐれい帝とひら
 よあつとてしはら一りく
 ぶらよらととのらら一りく

亦六一美よあとのころのよとあぐれい
 人うとてしはら一りく
 遺文三十軸々々金玉聲龍門原上
 土埋骨不埋名とりふた乃むかあそ
 線真云とてしはら一りく
 とつらあそとてしはら一りく
 よらまのむとてしはら一りく
 うら又とてしはら一りく
 亦七く一らんじく人のむ書と
 ころとてしはら一りく

黄壤誰知我白頭獨懷君將老并淚
一灑故人文いさひしとつふ跡の心かなむに

この古今よりありし

たハ まことしむかなるそよの志と家

こよのありわのうくれなむた

とよ衣のまうの甲よりわのうら

源頼家朝臣ありしとまら母のめま

よ出さしわらわることくよおしり

とてはうりたるがわはくまおと

とく人らうよのまかしくつらり

しめて九条内大臣家くして人く百

首のよもくたる時元日襲とつよま

顯照阿闍梨

じ月さくくあのみまわく百家の

とよのありわのうらめからん

とよめわらわるとくれくれとて

豊明のめまがわ元日襲ハ四月朔日

豊明やらふのめまがわ元日襲ハ四月朔日

と新したるよ作共の明と日か

記よ首の字とよめわは別名會

かりの裡（名）正月一日の元日の名義同七
 日の白子の名義同十日の踏前（名）は名
 會九月九日の守場（名）の名義同新嘗會（名）
 は名義乃名會かりつけぬケ名の名
 會の宣命よりれよりのありあり
 一めす日かありはつち舞（名）に
 一めす日かありはつち舞（名）に
 世かり成（名）いさよまよしは
 つきてえ日暮とよのありありの
 一めは社（名）てつちつちつちかりあり

ぬと（名）の先達（名）もこのころのありて
 法（名）せし（名）まよし（名）ぬと（名）の名會（名）
 せいありありのつちてりひ出（名）ありと
 めさりありありのめよ（名）し（名）と
 半（名）ありありのつちてりひ出（名）ありと
 十（名）りかりあり（名）讀（名）口（名）講（名）代（名）よりありあり
 ころありありのつちてりひ出（名）ありと
 はすくなたれ（名）の件（名）の阿（名）答（名）利（名）と（名）度
 字（名）かりありありのつちてりひ出（名）ありと
 一めありありのつちてりひ出（名）ありと

色華集下之三

四十三

しんを

元九百代と云りまわりのいひ

ぬらひゆくわえのまろし

はとのいふ東院まゝのいふ武勲の教

義親王生れ給つりりり内侍の

あてまつりて法皇院大入道ぬ

二代のお初としていみ給つりり

がりり万代とる万代なりぬらり

えとる天照天神のい孫天津彦彦

葦原瑞穂國乃ちとせんとて八咫

單たづね難たづね劍けんといふ言縁よあそ給ひ

しかりそりり代くるおはりて

い鏡との初の内護まもりなり又神かみ室むろを

國のまろしなれいれよとて

いみ給つりりいれいれとの初

とい天十指細とつみかり鴨柄を

いそていもえとつみかり又弁

柄かりもつりりいれいれとて

秘苑の半かりいれいれいれと

りかり古語拾遺よとていれ

亦 ありこころをうきしめしむる
おのこのちこころをうきしむる
琴のちこころをうきしむる
よりのちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる
いつれのちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる

うきよりのちこころをうきしむる
おのこのちこころをうきしむる
琴のちこころをうきしむる
よりのちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる
いつれのちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる
このちこころをうきしむる

まるくまうくさあてしふたかり
 借てゆまよそましくさうかうかあ志
 めとりまうのあるまあるか
 成口うさう飯のあまれを交音きて
 神海國宇土濱よ天人あかりめて舞
 今よあつたれなかり神更なれを
 しくまわなひつめあるかあ
 らん神なるぬつる神なつるま

こしの社の神かり神まの神ま
 神まあめのぬんくじ神のまをたれ
 神といろつのおりまうくつあかり
 又まぬまもひらゆけとつあ
 ありまんとてまうかうあ
 かりまをまうくつあを
 申とえらじ神乃ゆあなれひら
 くまうくま

林六の海ももろの車よりのわらわ
 られ二味のわらわよめをよめ
 法華經の二轉のぬえくのむなり
 一味乃ぬの法華經なりぬよのむ
 乃るまもろのわらわは平等六
 會乃法よの正見邪見もろの利益
 よあつらるぬえのむえ

和歌三は下之三

次類聚百首中め十一首

一 さかひめ 二 なつ
 三 あさくらさし 四 おもひのむら
 めいり 五 むらさき
 七 おもひのむら 八 神のひのり
 九 おもひのむら 十 けいけい
 十一 わらわ 十二 むらさき
 十三 むらさき 十四 むらさき
 十五 むらさき 十六 むらさき
 十七 むらさき 十八 むらさき
 十九 むらさき 二十 むらさき

一 さあひめしうららけし柳
 ありき風のうしろたわらわ
 さかぬくさなとほらさうら
 びのまのまのゆとよなわ
 柳とわしり詞なりわのま
 うららけしうららけし柳
 のまらあめらり髪よめらと
 気くわい風かぜ流なが新あらた柳やなぎ髪かみと云い詩うたの心こころ
 二 のりあめらつるあめら
 ありき柳のうしろたわらわ

山崎集

三

山崎集
 柳のうしろたわらわ
 さかぬくさなとほらさうら
 びのまのまのゆとよなわ
 柳とわしり詞なりわのま
 うららけしうららけし柳
 のまらあめらり髪よめらと
 気風流新柳髪と云詩の心
 のりあめらつるあめら
 ありき柳のうしろたわらわ

かつちいね杭^{かき}ねとめつるさそ申^あら
 かがりうさねのさねのうらなる木がわ
 ぬあまかつちいねつらぶつわつちい
 しる帆わけおむる舟めかたさすく
 めんとわつちい志あ縄とわわあふさ
 ろのくらわつちい海さし柳のす万紫
 ようくちい
 といさのさつちいらさしひま乃ゆ
 わさちいさささしひまゆりあさ
一 紫塵^{まじり} 嬪^{ひん} 蔵^{ざう} 人^{じん} 拳^{けん} 手^て とつふ待^{まち} のむく

のさつちいらわさちいらさしひまゆりあさ
 かつちいらわさちいらさしひまゆりあさ
 のさつちいらわさちいらさしひまゆりあさ
 のさつちいらわさちいらさしひまゆりあさ
 のさつちいらわさちいらさしひまゆりあさ
 のさつちいらわさちいらさしひまゆりあさ
 のさつちいらわさちいらさしひまゆりあさ
 のさつちいらわさちいらさしひまゆりあさ

三三三三三
 三三三三三
 三三三三三

むて勝とてしてしりまらふ事あり
ゆふよつめ事なり躑とふ事あり
躑とふ事ありむじなり或人云
交なまらるるなりとてかえん
や又のありとてかえん
なりとてかえん
なり或人云むじの傍に事あり
の事とてかえん
因横也とて國の事あり
躑躅とてかえん

とてしりまらふ事あり
ゆふよつめ事なり躑とふ事あり
躑とふ事ありむじなり或人云
交なまらるるなりとてかえん
や又のありとてかえん
なりとてかえん
なり或人云むじの傍に事あり
の事とてかえん
因横也とて國の事あり
躑躅とてかえん

記え乃ちふねふらふら北峯なり
山のこゝろはきしむのこゝろはさ
しむるいしむるいしむるいしむる
なりふらふらふらふらふらふら
乃ち古今云つて或人云青唐献公
と申すは今度献公と申すは
昭よと人乃ち皇子の申生重耳弟
吾とつふらの献美とて給ひてのら
躰戎のじよめ驪姫とつふ人と后
とてつらぬのささるに乃ち二人の

皇子あり実秋悼子とつふは獻公後
乃ちさるにのあとをして実秋と
白太子よ母とんと給ひは母后の
我あいつとさるぬくていひたり
さるの后の太子申生と太子よち
給ひと申給ひはるいしむる
りし事とて申生と太子いふて
給ひたりは後継母のさるにこ乃
太子とよひて云母とつらひて
よとえ給ひつれ抱らつせよとつら

白太子よ母とんと給ひは母后の

らくくまうくまかあさてえれを
りうさとい我りくしりち事てえ
とせよといしりくれに太子にまわし
てさんまてしりくくそののし家
てりのをのりごとと後母乃りく
くありくとと後母のさる記とめ悪
て帝獻公くわは出給ひくわくれ
くわもむりりくととまてむりく
くくくくくくくくくくくくく
附子といわ物むりりくくくくくくく

てとくくくくくくくくくくくく
毒とわわわわわわわわわわわわ
太子のりりりりりりりりりりり
とてとてとてとてとてとてとて
りりりりりりりりりりりりりり
りわお事おいおいりりりりりり
まうりのよまうりあてとてとて
とよまうりあてとてとてとてとて
會歎死するととてとてとてとて
へめあ人のおいおいりりりりりり

111

111

位より上りてはんさて親とてらん
とすりよとささくまふあつらひ
りよは獻公大は腹立てあさま
りあて極悪夫とてしてせり
て太子申生とらりて母てり人
乃後母のむあつらひとま
とり時乃人つひかりをのり
りよとてい半よその先祖の廟が
よまつあめり飯がとつら
そまのい昨は字あさくまふ
委史記

あつらひ

九 じう一うあつらひあつらひ
しつらあめりのむのら
今日のあつらひあつらひ
神のあつらひのうのあつらひ
なり
乃案内
ア一よあつらひ
とつらあつらひ
十 ありあつらひ

十二 じふに び ひ 人の ひと こと こと 神 かみ こと こと あり
ひ ひ 人の ひと 神 かみ の の 事 こと こと こと あり こと 今 いま
より より あり あり 神 かみ の の 遠 とほ 事 こと こと こと あり
え え こと こと あり あり 仁 に 天 てん こと こと こと こと あり あり 春 はる
二月 ふたつき 庚子 こうし 朝 あさ 田 の 道 の 間 ま 守 もり こと こと 常 とこ
世 よ 國 くに こと こと あり あり 時 とき こと こと あり あり 事 こと こと こと あり
り り こと こと あり あり 今 いま 乃 すなはち こと こと あり あり 事 こと こと こと あり
廿 ふた 九 こ 十九 じゅう 年 ねん 秋 あき 七月 しちがつ 戌 いぬ 子 こ 朝 あさ 天 てん 事 こと 源 げん
向 むか 向 むか 乃 すなはち 事 こと こと こと あり あり 干 かん 時 とき 百 ひゃく 事 こと 事 こと

廿 ふた 九 こ 十二月 じふにがつ 癸卯 みづのへ 朝 あさ 王 わう 子 し 菅 すげ 原 はら 伏 ふ
見 み 陵 のり こと こと あり あり 事 こと こと こと あり あり 年 ねん 事 こと
春 はる 三月 さんがつ 辛未 しんみ 朝 あさ 壬午 にんご 田 の 道 の 間 ま 守 もり 常 とこ 事 こと 世 よ
國 くに 事 こと 賣 う 物 ぶつ 二十 にじゅう 一 いち 班 はん 時 とき 香 かう 菓 が 八 はつ 管 くわん 事 こと あり
事 こと 事 こと 即 すなはち 天 てん 王 わう 山 さん 崩 ゆがみ 事 こと あり あり 事 こと 事 こと
か か 事 こと 悲 い 歎 たん こと こと あり あり 事 こと 事 こと あり あり 天 てん 釣 つり 事 こと
う う け け 事 こと 遠 とほ 往 むか 絶 つ 城 じやう 踏 ふ 万 ま 里 り 波 なみ 遠 とほ 事 こと 事 こと あり
水 みづ こと こと あり あり 事 こと 世 よ 國 くに の の 河 か 神 かみ 仙 せん 秘 ひ 區 く
俗 よこ 臻 とほ 事 こと あり あり 事 こと 是 こゝろ 以 もつ 往 むか 未 み 間 ま 事 こと あり
事 こと 事 こと 十年 じゅうねん 事 こと 事 こと あり あり 事 こと 事 こと あり あり

色集巻下之三

三

独波瀾と一のまて文よが古よ
じつらむい志うらひ聖帝神と
てらうい還来半とえらわ今天
字とそに筋ひて後令とら
アとかわあわくも又かひ乃
益のめじとてこささいじひ
て呼哭して自死ぬ群長とて皆
なととさながらうく月日記よ
ええとらされいれららぬ
世うり物来菓がらり載あさ中

和長歌のよ

あせらわりのたのまとうら
山がうらぬあわのそまの
くよあつともはをく

十とめりぬよまのいかりうらた
あつらとわらうら

礼記きらい月令つきぎょう日脣にっしん草化くさくわ為な蠶さく又また在あ
詩日しじつ荊けい鞭べん蒲ぼ朽く堂どう空くう去きょ

古こあつらとわらうらとあつら
あつらとわらうらとあつら

五月とありは碑^イとて用即熱用
よありて砂酒と漬^イ用なりあり
子別を砂と持来りありは融^イする
馬^イありとありは融^イするあり
後季^イありありてありとあり
かありてありありて氷乃^イ融^イ
かあり妻目日記よありあり
十六とありは吹^イ雪^イ乃^イ融^イ
秋^イありありありありあり
とありありありありありあり

又時なりとありありありあり
ありありありありありあり
十七いありありありありあり
志^イありありありありありあり
いありありありありありあり
引^イ率^イありありありありありあり
志^イありありありありありあり
いありありありありありあり
十八ありありありありありあり
終^イありありありありありあり

けしむの情なりしを母の思ひの秋書
乃しとて後よりしむ物なるを
と能くして基傍の長よありなる
アアとの思ひし人とうして
乞えのらよありありなる
わろくの思ひの思ひなる
くれの思ひの思ひなる
とよありなり書曰王番張衡馬陶と
りふくの思ひの思ひなる
とよありなり書曰王番張衡馬陶と

死ぬるつらぬる酒との思ひ
酒の食せし死するを思ふ
なんわろくの思ひの思ひなる
うして死しとよありなり
けしむの思ひの思ひなる
ホ六の思ひの思ひなる
月よとて思ひの思ひなる
いふの思ひの思ひなる
月とありしなり大書に載る
子蘇家といふ思ひの思ひなる

致剡縣然而不尋王子猷還人間故雪
 月興よくうて事きつり然る月入
 雪消ぬ故還や何必る安んてく
 ところのういふこととありり
 亦七菊乃花ありてあつる各河の
 疑瀬拔云酈縣少よめ十里よ菊溪
 あり深る洞くり出らるよ耳菊あり
 村人のありとのことのことのことのこと

未也の荆列記よくえくり又云南陽縣
 小耳谷ありり谷のあり耳谷なりあり
 山上よ菊花ありりありとありなりれ
 くらりととととととととととととととと
 亦餘家井とありとととととととと
 のじ上壽乃りのい二千年申壽の
 のい八百年がりありる風俗通り
 々々くくり又菊花序よ記納云乃約
 序云谷水洗花汲下流而得上壽者三
 十餘家地脈和味喰日精而駐顔者五

百歳云

八太山つの時多て海り子に
玉柏ふ二乃あわり難波はた
うつりたるとつみより一の葉
まろくておよほらとりよかり
又お柏ふにかじり初なりあ
坊丸ゆめあちのさるれおちの
略のうはをまらじも
ゆふりわらふク凝きなり

とらまらなり

味も砂乃かのの鏡のき
わらうさうしてあやとらん
唐がうの豊山ひやうざん鎮ちんとつみあは
さるめあてうのまらな
乃夫らわておわさゆら
よ初とさとかこさなり
砂の尾上のののかり
わらじとよりなり古詩日歌和
豊山鎮鐘色否其奈花亭鶴驚何

即は公と依りあり

可一任者のらしきはしるべきいひおほそ

お悪まうしあまなきいけりあり

らしきふかうつらちの神乃社

のひのわら木かちうしるきさとい

棟のうしうらりきさてぬく刀

乃てうよてあり木かち或人い

うしるきさと創るよしうしれ社よ

よありしうらのめ神は齋殿乃あ

きしておほおのあまうしうらりき

院宣一てしるしのはるよPしせ給ふ

とておつしむしとあしうしるき

よませ給ひくらあまを公任は給

後よしうしよのわしとてしるき

がわしとてしるきとてあまのし

給給所よのしとよありなわし

とらうぬりPしあまのあま

うしとてしるきとてあまのし

むうしとてあまのしとてあまの

しとてあまのしとてあまの

人のうへいよらひしらりある先
達の手書らんがれいあきて信を
とらふかあやまらぬむよらふ
なく難せんしふらうあわかと
めりふりあがわらうの橋の平
い妻万あまらうち

此二からしむしんはあらじれ
しんはあらじれ
かりしんはあらじれ
わらじしんはあらじれ

わらじしんはあらじれ
らじしんはあらじれ
いせのうらじれ
そむかあらじれ
さきのがあらじれ
なわらじれ

あらじしんはあらじれ
あらじしんはあらじれ
あらじしんはあらじれ
あらじしんはあらじれ

は後不審なり可きありとも使ねりえ
乃ぬじりきよとありていつりき
つらありあまのきりてい神樂
めてあまのきりてと天照太神乃
あけけりていつりあまのあ
とていつりあまのきりていつりあ
いつりあ神樂の曲なりとい大第曲
よもあまのきりていつりあ
入りていつりあ神

糸の詞可きありていつりあ
とていつりあ大第曲
あまのきりていつりあ
いつりあ神樂の曲なりとい大第曲
よもあまのきりていつりあ
入りていつりあ神

ふみふみよき響くよ沙の影がわ
右今よあよも

とらうらひさみあふた海のよ
りかたおつとふとこころよ
とよりあよりうらふあよまらう
成七なりいよのじとたふあ
つとよ旧のーのよらうじ
或人云かひよよのじとたふ
何年もたふいよらうかひーのよ
いよきかひーのくといーき

とらうらひさみあふた海のよ
成八右のせのうらふよらう
竹とらうらひさみあふた海のよ
七乃ーいよとらうらひさみあふた海のよ
者魏歩兵校尉陳留院籍字嗣宗中
散太史樵鷲康字叔夜建威冬軍
沛劉伶字伯倫始平太守陳留院威
字仲容散騎常侍沙内秀字子期晋
司徒沙内濤字巨源司徒琅瑯戎字

藩仲此内山濤王戒ハ後ハ世の人なら
つよよりてませる世の人にして
跡み人とおまゝつよよし世人世と
て竹の林よりわて人よま
ぬりてわわらひる酒を
らぬて奥へ入るわらぬ林の
中よて想ふとむと符とぬん
てとらわらわらわらわらわら
帥大侍のむけと濤のまよま
らぬのせらるる人よ

けりら物にむけよわわら
とめわらわらわらわらわら
ととえわら
亦九我をくもむらわらわら
らららららららららららら
我をく朗詠集云晋騎兵參軍王
子猷裁称此君唐太子實客白糸天
邊又為我友はむわら
軍らららららららららららら
けらららららららららららら

じし 竟の代より鞍と門よりきて
訃訟ありんかうらむかきくして暮せ
しかなあまうあこもくして日海波
おるるしかなれぬ殊鞍うらんもなき
て禽獸がぬて古あひしうきわそ
あわししわたり帝徳乃りてなる
しよよしういしよありあ武云殊鞍と
つみの記録所よとくくうめりしし乃
くながり保元の内裏房東宮学士後
憲の風属垂衣色漸暖鳥訓諫鞍曲初

末と山くあさいられも帝徳とがじ
お後わたり
軍一決のあさかろ子とけりあ
うたもむもきくうあさしじ
かろ子とかりあさいけろ子とけりあ
とりあかりあろ子とかりあさしじ
しし 朗詠よせと中法冷々あ
憶子 亀中鳴とりあさしじとあめりな
おし かなしきしあさしじとあめりな
杜鵑がうめく里のあさしじあめりな

ついでうまねぬらみゆり
ふらふらと牛あもくしむらびら
里のわれりしむじなりなるの初
よまらうち
軍二勢とまふれさなきまぬ
じーのふさまがのつたわ
わらふとまふれさなきまぬ
威とつふ仙人の遼城事ともあり
鶴の舊里丁令威之詞可聽竟迎新
儀陶安公之駕在眼と云詩のむら

續搜記曰遼東城門有花表柱鳥云丁
令威也家去千年末のま遼城花表
柱鶴居は世よ鳥居とて仙神のま
とてめつる花表柱とまぬつらと
なんいひつらぬる露のぬらり
ゆらぶ鳥居とま
軍三あまむらむさういかならん
四色の露のらよじまがく
わらふらとまふれさなきまぬ
うらふらとまふれさなきまぬ

ぬのしほりし事よ可成るるし
 軍司らんまのいんたあさるわが
 心よとくたなきたあさるわが
 りぬらりし心可成るるぬ
 游のゆかりのぬらりし心
 ましとくたなきたあさるわが
 うきわとくたなきたあさるわが
 うらまのわらわらとくたなき
 わたりし心可成るるぬ

早お板の關のせきあはるる
 じまやつしほの鈴もあはるる
 驛路鈴巻夜過山を官使のゆきて
 ちりし心可成るるぬ
 ちりし心可成るるぬ
 ちりし心可成るるぬ
 ちりし心可成るるぬ
 ちりし心可成るるぬ

とめて七通へつらうとよの官使よ
つて終ふかあ七終の仲よ一よの
乃しけある終ありまを終りめ
あつらひんらちのちよてよら
よつて抱わしつひ終りめ
軍共つらうの橋とんれまをんれ
つれおんせあるらうてまなく
板奈橋の海中はよわわいなあせ
るよのこといつらうの流ありた今よ
つらうとよとらうてよすとい

るよのこ

軍七のあま橋程をさつて
びーのんらうわあしつら
橋をらよとつてつて漢書
司馬相如字長卿成都人蜀城北七里
有昇遷橋題其橋曰吾不此車駒不復
過此橋武帝善其才乃騎掌侍後遷
中郎云象求曰相如題橋とつら
この中がの司と云い固乃橋なり
掌侍とつら女を中郎と云れた象

門金吾監門中郎將を又左右近衛
中少將羽林中郎を次中よかなの
初め多れい伝き一々わくのいよめる
かあり

軍八の軍よりか旅も志せしめらんあ
人よまらつと身もそむいぬ
ぬまのいりりい教とらわらふ
もわわいりいよ命りいんじい
おさりりいりいありかあり又え速打を
おさりりいりいもわわ一方

ぬまのいりりい乃大妙よい
あさあまのいりりいりれさあ
はあの節的天皇月妙よて得一
ひ一財中皇令使間人達難軟
うら妙よ速打會ありりりい
義のよまてあてまらりりい
ん速打とつふ後もありり一速打乃
平の貴帝子皇女坂泉妙よて合戦
一給ひりいを鐵身よて貴帝
乃美よありりりい貴帝仰天河

時む廿天、あくもめて、反閉、密尤、
と忽始湯解て被殺、牛仍不、虫を以、
打之、練打、是なり、丸眼射、今、的、是、
なり、上、ち、ま、年、始、一、用、一、括、固、中、
云、函、半、か、わ、き、日、中、固、の、字、を、例、
年、始、一、練、打、と、う、い、か、り、ま、ん、別、
練、打、の、木、樹、其、く、り、ふ、か、り、天、主、其、の、
く、あ、ま、括、覧、内、地、逐、上、右、例、練、打、
會、の、あ、ま、ま、あ、あ、あ、あ、ま、ま、ま、ま、
く、い、る、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

あ、ら、く、い、る、ま、ま、の、あ、ら、く、い、る、ま、ま、
軍、光、く、一、宿、の、夜、い、あ、ま、ま、あ、あ、あ、
と、か、り、あ、の、あ、あ、あ、の、ま、ま、ま、ま、
浅、茅、の、半、の、後、拾、遺、ま、ま、ま、あ、あ、あ、
新、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
と、い、向、子、期、く、ま、ま、ま、あ、の、あ、あ、あ、
半、あ、あ、あ、あ、新、朗、詠、云、梁、雞、栖、而、遲、
唱、笛、吹、向、子、期、之、隣、溪、月、臨、而、雞、傾、砧、
怨、楚、屈、原、之、舍、ま、ま、
あ、十、百、年、の、花、ま、ま、ま、あ、あ、あ、あ、

此書集

三

その世にてもその世にてもわが
の世にても百業かたわが世にても
唐の世にても周の世にてもわが
てあつてあつて百年よりあつて
周の世にてもあつてあつてあつて
よあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

漢書曰文帝好文而臣好武景帝好義
而臣已醜階下好少而臣已老故三代
不遇云橘正道怨書文曰齡止顏
遇三代而猶恨同伯鸞歌立意而將去
云云今乃難後共云乃
は傳云乃今乃難後共云乃
てかたわが世にてもわが
かたわが世にてもわが

漢書曰文帝好文而臣好武景帝好義

唐書曰

わたりしやまきくぬりたるや
まじしきよなるらんとうり
ほくく入るわらわぬは
世のちのちとむるあつじり
と秘するは老翁めもたなく志を
まげてあれいしく和方の奥
後いれよすにゆきま
ましく持てあ乃冠者とりま入道
つれつこていれいこいこ
Pせこのうらの秘法ありこの前の

別々のありP次よPして心相を
を極いりぬくりあやと道守師
府よのわらわて乳堂なりうじり
よ徳者よくなわぬて正者よ入
る極むき又説法半とりわて集
會下向する時入道老翁會天
なりわとがしてゆき愛隠士ふ
愈よ和方の乃ち系とまて自然
よ誦法のりやまとまわぬ具
息子の癡忘より行へ具初心の

和方
初心

腫蒙とくくめひくくめよ高橋よ
馳鯨早早筆よ註昏とく錯字か
かくくじ謗難不少者歟

仰予依一寺之昨通万事之間投略按
之卓見廣学之处許害無極感氣有
餘雖佯嘲哂彼書狀云三卷髓腦六儀
肝心也扇喜撰之風進然因之跡不堪
感邪心加一篇

難波洋のくくめひくくめよ高橋よ
くくめひくくめひくくめよ高橋よ

建久元年十一月十一日

顯昭

右中辨長房朝臣令遺先道内供之
書狀

寂上品白柏子一可作進之由可被仰上
字法師之由内々作也可傳給也其篇
可作者之志又對面申候くくめひくくめ
臨可候也

十二月十一日

右中弁長房

於是上覺謹奉 院宣候進歌舞一通之次先日召仰草本八帖可返願之由乍恐言上兼又幸得便宜和歌抄三帖副差達之

其返事狀

一通三帖給幸早可經天覽六帖返獻之今二帖在化所逐可返獻之狀如件

二月廿二日

在判

重觀天氣之處忝蒙御感侍一通三

帖經觀覽早神妙之由有其沙汰欽仙系圖事則面如件

十二月九日

在判

杖多年運心雖不屑之患身已遂羨聞之畜望幾哉歡感倫以以螢雪之求素永成龜鏡之德基帝晁施一身之名聞兼可為万人之勵證者欽如後拾遺續詞花千載集者皆各雖私集經達為勅撰是雖私抄備觀覽頌天感藝古准今誰敢輕毀哉

右中弁同宿舎第形部權大輔宣

房書狀

先日芳札罷々紛々際不献患報丸
本音候於一通三帖即羨覽雖不及
匹綱殊有歡感之由右中尚書常被
詔申以是米一旦之歡感已為万代之
名譽好道之軍定競十舍顯欽此道
之般系昌不可疑允兼悦云一本可書
給之由尚被申候也允可昏進給曆
裏被書付之糸允面目候申帖未召

寄候也念々可進候又下帖許料昏献
之是可被終功候也

正月九二日

依此書狀案事次才雖為謗訥之輩
難經天聽之所以篋居身收御物之
糸生涯面目後葉手鏡者欽仍懷万
悦私送一首

めくく花の初よりあがり
うきものの梅乃いりかたも
御抄物事内々於傳兼事者事不

注申哉令仰敢可加辰吻候也

正月八日 刑部卿大輔宣房

人等れぬ念りうきく〇此梅るれ

餘味九字まてよ白ふりりりり

余出動面目の事半動否の事

難動天動之世の事

不堪初學者卒余之仰殊耻思候不
可有披露早破之念佛讚二卷給候
予早可傳歎候也每事期後信之狀
如件

弘長二年^壬戊三月十三日

此書自或方出現以兩本看早 雖然誤多
之重而求他本可相改者也

